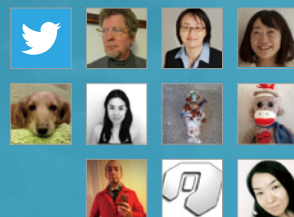
翻訳の未来を考える

JTF JOURNAL

#272
July / August 2014

JAPAN TRANSLATION FEDERATION

一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌 日本翻訳ジャーナル

特集
メディカル翻訳

定時総会基調講演「日本の翻訳産業の実態」

第60回ほんやく検定合格者発表

July / August 2014 #272

contents

特集：メディカル翻訳

イベント報告

連載コラム

JTF <ほんやく検定>

表紙のひと

「渡邉麻呂さん」

今年度の日本翻訳連盟定時社員総会が6月10日に開催され、新任の理事として上田輝彦さん（WIPジャパン株式会社代表取締役会長、写真前列右）と渡邉麻呂さん（株式会社十印代表取締役社長、後列右）のお二人が、また新任の監事として中岩浩巳さん（アジア太平洋機械翻訳協会会長、後列左）と玉井康裕さん（株式会社クロスランゲージ専務取締役、前列左）のお二人が就任しました。今月号の表紙には、四名の中から渡邉麻呂さんに登場していただきました。渡邉麻呂さんは日本翻訳連盟を創設期から支えてきた株式会社十印の勝田美保子会長のお孫さんでもあります。翻訳業界の新しいリーダーのひとりとして、日本翻訳連盟に新しい発展をもたらしてくださることを期待しています。
一方で、任期満了にともない福良雄理事（WIPジャパン株式会社代表取締役）、吉野徹夫理事（日本アイ・ビー・エム株式会社）、井佐原均監事（アジア太平洋機械翻訳協会理事）、古賀勝夫監事（株式会社クロスランゲージ代表取締役）が退任しました。四名の皆さんの日本翻訳連盟に対するご協力とご貢献に感謝いたします。（河野）

一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌
日本翻訳ジャーナル
2014年7月／8月号 #272
発行人●東 郁男（会長）
編集人●河野 弘毅

一般社団法人 日本翻訳連盟
〒104-0031
東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
TEL. 03-6228-6607　FAX. 03-6228-6604
E-mail. info@jtf.jp　URL. http://www.jtf.jp/

メディカル翻訳

メディカル翻訳会社若手リーダー座談会

最先端医療と新薬開発を支える翻訳会社の舞台裏

メディカル翻訳というジャンルは、実際には、医学・薬学に関わる様々な翻訳を指す。医学論文や学会用の資料・原稿といった学術文書や、製薬会社や医療機器メーカーによる各国の規制当局に承認申請を行う際に必要となる書類、医学学会から発行されるガイドライン、取扱説明書、販促用の資料、医薬関連の書籍や学術誌の記事なども対象となる。高度な専門性が求められる文書が多いので未経験者のハードルは高いが、景気に左右されず、安定した需要を見込むことができる。ただ、業界のグローバル化のスピードは加速し、専門性と時間の制約は厳しくなるばかりである。そんな中、業界をリードする3社の若手リーダーに集まっていただき、メディカル翻訳の魅力や市場の動向、翻訳者に期待すること、翻訳会社の価値と役割について語ってもらう。

Panelist パネリスト

株式会社アスカコーポレーション 営業部
シニアプロジェクトマネージャー
中西 崇生

メディカル専門。製薬／医療機器メーカー、大学·病院、研究機関、出版社、代理店などへ、翻訳を中心にメディカルライティングなどクライアントの要望に応えるサービスをトータルに提供。

株式会社 MCL
シニアコーディネーター
吉田 久倫

メディカル専門の翻訳会社で、製薬及び医学全般、歯科や眼科、整形も含め専門的な内容に幅広く対応。

株式会社翻訳センター 大阪第二営業部
医薬部門スーパーバイザー
阿部 博一

メディカル専門として創業。現在では、特許、医薬、工業、金融・法務の主要4分野を取り扱う日本最大規模の翻訳会社。

伊藤：今回は、産業翻訳の中でも医薬（メディカル）に携わっている関西の翻訳会社3社の若手リーダーにお集まりいただきました。関西は製薬業界のルーツであり、今でも主要産業のひとつです。メディカル翻訳業界の現場で起きていることやその魅力についてお伺いしたいと思います。

Moderator モデレータ

株式会社アスカコーポレーション　営業部
QC コーディネーター
伊藤 聡子（JTF 関西委員）

伊藤：メディカルといえば、まずイメージされるのが非常に専門性の高い分野だということですが、それぞれ品質面ではどのような取り組みをされているのでしょうか？

吉田：MCL は「常に100%の品質を目指す」ということを会社の基本としています。翻訳者とコーディネーター、チェッカー、エディターが一丸となり、妥協することなく常に100%の品質を目指すことを第一に考えています。具体的には、翻訳文チェックの際に、社内ノウハウをつぎ込んだ自社開発ツールを活用し、チェック作業はすべて社内で行っています。加えて、最終チェックとして経験豊富な社内エディターが文章全体を論理的科学的観点から見直すというプロセスを入れています。

阿部：品質という言葉はメディカルに限らずよく使われますが、定義が難しいところがあります。翻訳センターでは「ケアレスミスをしない」ということを最重要視しています。通常の校正者やチェッカーは専門用語や文法、表現などをチェックしますが、彼らとは別に数字や記号だけをチェックする「ポイントチェッカー」もいて、ケアレスミスを防ぐ体制を整えています。

中西：当社では翻訳者を登録する際のトライアルに重きを置いています。多角的な基準を設定し、登録者を厳選することで一定の品質を保ちます。翻訳プラスアルファでは、必要に応じて医師の監訳を追加することができます。現役の医師や研究者とのネットワークは当社の強みのひとつです。また、当社では営業職とコーディネーター職を分けず、プロジェクトマネージャーがクライアントサービスから工程管理まで一括して行います。これによりクライアントからの情報を曲げず、歪めず、ダイレクトに翻訳作業に反映することができます。

伊藤：高品質のほかに求められるものは何でしょうか。

阿部：クライアントである製薬会社にとっては、1日でも早く新薬を世に出すことが社会的使命であり企業利益にもつながります。そのため短納期へのニーズは非常に高く、ツールの進化はますます加速しています。欧州ではすでにツールを用いた翻訳が主流になっていて、その傾向がここ数年で顕著に

あらわれています。グローバル対応という意味では、この点でクライアントより遅れているようでは生き残ることは難しいと思います。
中西：大きく3つに分けると、価格、納期、品質が挙げられると思います。まず、価格面では、競争力のある価格設定を希望されます。外資系の製薬会社では、購買部門が主導して推奨ベンダーを選定する動きが近年見られます。次に、納期ですが、グローバルでリアルタイムに業務を進行するためのスピードが求められます。そう遠くない未来に起こり得る世界同時申請を実現させるため、翻訳会社もクライアントのスピードに付いていく必要があります。最後にやはり、究極的にはそのまま使える成果物が一層求められています。
吉田：情報伝達の速度は飛躍的に高くなっています。一方で翻訳というのはまだまだ人の手や頭脳を要するものであり、ツールや情報検索による効率化は進んでいるものの、翻訳スピードの向上は情報伝達速度の進歩には追い付けていません。さらに、日本語は欧州言語とは違って英語と言語構造が大きく異なるという翻訳上のネックがあります。これらが日本におけるローカライズの大きな課題であり、その解決にはさらなる取り組みが必要です。
阿部：費用ももちろんですが、納期面での競争もますます加速していますね。
吉田：常に品質を確保しつつスピードを上げていくことが求められているので、リソースや段取りの調整には毎回難しい判断を要します。それをカバーするには、クライアントとのコミュニケーションが重要ですね。どこにニーズがあるのかはもちろんのこと、どういうコミュニケーション方法が望まれているのかというところまで把握する必要があります。
伊藤：業務の効率化で工夫されている点はありますか？
吉田：事前準備が重要だと考えています。例えば参考資料を準備すること。またクライアントごとのニーズを十分に把握すること。コーディネーターは原稿を受け取ったら、納期の観点からもすぐに翻訳に着手したいところなのですが、案件によっては準備に時間を費やすことが必要で、結果的にそれによってその後の作業時間が短縮されることが多々あります。
中西：少し観点を変えてお話しすると、翻訳者の方々も人間ですので、モチベーションを高く持ってもらうことは重要だと考えています。このプロジェクトに参加したい、この仕事をしたいという熱を伝えてくれる翻訳者の方と仕事がしたいですね。熱を伝えてもらうためにはコミュニケーションが必要ですから、社内の勉強会に招く、プロジェクトのキックオフミーティングから参加していただく、そして、食事を共にするなど関係を築くことも重要視しています。精神論に聞こえるかもしれませんが、翻訳者の方々が自発的に意見や提案をできる雰囲気や場をつくることは非常に重要だと思います。

市場の動向

伊藤：メディカル分野は需要が安定しているとよく言われますが、実際のところはいかがでしょうか。
中西：品質とコストを一定化させるために外注先を数社に限定するクライアントが顕著に見られます。当然ながら、優先または推奨ベンダーに選ばれると確実に受注が増加しますが、選定されなければ受注がゼロになる可能性もあります。
吉田：メディカル分野では、「翻訳者が質／量ともに飽和する」という状況にはまずならないと思います。専門知識が豊富な翻訳者の平均年齢はどうしても高くなるという傾向がありますので、どの翻訳会社でも、積極的に新しい翻訳者を採用する継続的な努力を行っていると思います。ですので、より多くの翻訳者の方々にぜひアプローチしていただきたいですね。
阿部：業務としての翻訳の依頼だけではなく、派遣翻訳者に対するニーズも高まっています。具体的にはクライアントである製薬会社のオフィスに常駐し、臨床試験に関する資料をクライアント先で翻訳していただくというものです。翻訳者にとってもフィードバックを受けやすかったり現場の状況を知ることができたりと、これから医薬翻訳者としてキャリアを積もうとする方にはメリットの多い仕事ではないかと思います。
伊藤：翻訳者の需要となるとどうでしょうか。
阿部：登録翻訳者が増えていくのと実際の稼働翻訳者数というのはイコールではないのですが、全般的に見て登録者数は増えています。また、単価や納期についても、先に出たような競争はあるものの、ほかの分野よりは恵まれているかもしれません。

翻訳会社の責任と役割

伊藤：翻訳の受注形態として、個人でクライアントから依頼を受けている翻訳者もいると思いますが、それに対して翻訳会社として受注することの強みはあるでしょうか。
中西：個人のフリーランスの方々と比較すると、私たちはやはり会社としてクライアントと向き合いますので、対応の幅に違いが出てくるかと思います。例えば、クレームや業務改善の場合、個人で取れる対応の幅には限界があるかもしれませんが、会社であれば組織として改善策を提案することができます。
吉田：少しアプローチが違うかもしれませんが、私は翻訳会社における翻訳のプロジェクトは映画の制作に似ているのではないかと考えています。つまり翻訳者が役者さんで、コーディネーターやチェッカー、エディターがいわゆる「裏方」です。一言で裏方といっても、様々な役割を担っています。お客様が観たいと思っている作品に仕上げるためにはどうすればよいかを常に考え、役者さん（翻訳者）を陰で支えつつベストパフォーマンスを引出し、最終的にはお客様、すなわちクライアントに、携わったメンバー全員の力が結集した完成度の高い「作品」として満足いただける翻訳に仕上げるのが翻訳会社の存在意義であり、また醍醐味であると考えています。
阿部：個人では対応できないことがチームではできます。大量かつ短納期

の案件や大型のプロジェクト案件などは特に、翻訳者だけではなく、営業、コーディネーター、校正者、チェッカー、オペレーターなど、複数の人間がひとつのチームとなって対応していくことが、今のクライアントのニーズに応えるには必要だと思っています。

伊藤：翻訳会社と仕事をする翻訳者にはどのようなことが求められるでしょう。

阿部：プロ意識ではないでしょうか。といっても特別なことではなく、クライアントからの指示事項を守り、納期を守り、納品物に対して責任を持つというある意味当たり前のことを、きちんと高い意識を持ってやってくださる方とはぜひお仕事をしたいと思います。

吉田：ご自身の強みを把握していることも重要だと思います。現実的に、ひとりの翻訳者がすべての領域をカバーすることは不可能ですし、翻訳会社も翻訳者にそういった期待をすることはありません。しかし、この領域の文書なら任せてほしいというご自身の強みを把握した上で、アピールしていただけると一緒に仕事がしやすくなります。

中西：メディカル翻訳はレギュラトリーの下で行われていることを心得ている方。薬事行政や規制当局の仕組み、製薬会社の組織機能など、英語以外の勉強をしていることは最低限必要です。メディカルにおける翻訳は創造物ではありません。この業界で使われている言葉を適切に使わなければ、どれだけ美しい英語や日本語であっても使い物にはならないと思います。責任感は当然のことです。

伊藤：最後に、メディカル業界はどのように変わっていくでしょうか？　みなさんの予想をお聞かせください。

吉田：IT とのコラボレーションが進むでしょう。しかし、完全な機械翻訳が翻訳者に取って代わることはないと思います。ただ、背景の変化として、学校教育の恩恵などにより、一般的な英語の読み書きができる人口は間違いなく増えると思います。ですので、メディカル分野の翻訳に求められる専門性は今後ますます高まるのではないでしょうか。

阿部：支援ツールの進化によって、今のスピードやコストの問題がクリアされてしまう可能性があります。その結果、日本国内だけでなく海外の会社が競合相手になってくると考えています。コスト競争の激化や人材の流動が起こり、それに対応できない会社は淘汰されていくことになるかもしれません。

中西：極端な言い方をすれば、翻訳という概念がなくなっているかもしれません。翻訳会社が柔軟に形を変えて、その時代で求められるサービスを提供できないと、やがて淘汰され、存続が危ぶまれるのではないかと思います。

伊藤：本日は貴重なご意見をありがとうございました。厳しいながら、魅力的な分野であることが伝わってきました。メディカル分野に興味のある読者の方々にとっても非常に有意義な内容だったのではと思います。皆様の今後のご活躍をお祈りしています。

メディカル翻訳の極意：
原文に足さず、引かず、コンセプトを伝える

株式会社アスカコーポレーション
顧問、シニアトランスレーター
渡辺 典子
Watanabe Noriko

「赤毛のアン」などの翻訳で知られる村岡花子を主人公とする今期の連続テレビ小説「花子とアン」が好評で、私も女性翻訳家の先駆けの生涯を描いたこのドラマを毎朝興味深く見ている。第32話で、「翻訳とは原文との距離感が大事なんだ。原文に引きずられて直訳や不自然な日本語になってはいけないし、読みやすさを重視して端折りすぎても駄目だ」というセリフがあり、「原文に足さず、引かず、コンセプトをそのままに伝える」を目標とする私は思わず頷いてしまった。メディカル翻訳なので、正確な内容理解は大前提として、その上で原文全体の流れを理解し、センテンス、パラグラフ、セクションがそれぞれに果たしている役割を俯瞰的に把握し、それを反映させながら訳文を展開させていくことが大切だと考えている。

メディカル翻訳では何より正確さが求められる。内容を正確に理解するためには、まず経験を積み、多くの疾患、多くの薬剤について幅広い知識を集積していくことが重要である。また、言葉は常に新しくなるので、辞書の訳語にとらわれず、現場の医療従事者や研究者がどんな言葉を使っているのか、アンテナを張っておく必要がある。実際の翻訳の作業においては、クライアントから提供された資料の中から必要不可欠な情報を迅速に抽出したり、インターネットなどによる検索で周辺の状況について理解を深めたりすることを心掛けている。経験と知識があれば、原文には書かれていない背景を察知することができ、より的確な訳語を選び、ニュアンスを過不足なく伝えることができる。

学術文書には無駄な文章がなく、ひとつひとつのセンテンスに意味と役割がある。つまり、結論に向かって何らかの役割を果たしている。前後のセンテンスとの関係や結論に対する位置づけを考えれば、おのずとその役割が浮かび上がってくるので、それを活かした訳文にすることにより、論理性の高い、読者が理解しやすい翻訳になる。これはセンテンスに限らず、パラグラフ、さらにはセクションにも当てはまり、ひとつひとつのパラグラフやセクションがそれぞれに持つ役割を十分に果たせば、よりオーガナイズされた文書に仕上がる。最初に自分が原文を読んだ時に得た知識や印象を訳文から読者にそのまま感じ取ってもらえることが理想である。

こうして最善を尽くした翻訳もクライアントのジャストなニーズに応えることが最終目標なので、時に自分の意に反しても、クライアントの好む表現に合わせられる柔軟性も翻訳者に求められる資質のひとつだと自分に言い聞かせている。

医薬（メディカル）翻訳の未来は明るい？

株式会社アスカコーポレーション 代表取締役
日本翻訳連盟理事
石岡 映子
Ishioka Eiko

2013年度の翻訳白書の中で、価格競争は激化しているものの、市場は拡大傾向にある、との見解が示された。興味深かったのは翻訳会社の取扱い分野。翻訳業界は長く IT が牽引し、前回（2008年度）の調査では33.6%を占めていたが今回は18.5%に縮小している。一方「医薬・バイオ」分野はこれまで1ケタ台であり、前回の調査では9.2%だったが、今回は12.2%に伸びている。

翻訳者への調査でも、翻訳収入に占める主要な分野のトップは「医薬・バイオ」（21.7%）だった。個人の翻訳者向けの調査は初めてであったため過去との比較はできないものの、医薬（メディカル）分野は躍進し続けていることが考えられる。

医薬（メディカル）翻訳といえば、ハードルは高いが、高い収入が見込め、景気に左右されない分野だと思われている。確かに翻訳業界の中では少数派ながら堅調な伸びが続き、今後も続くものと期待されてきた。

ところが近年は事情が違う。業界は「曇り」。薬価引き下げ、新薬開発の難航や特許切れによる後発医薬品への切り替えなどで、国内外の外資・内資や会社の規模にかかわらず、いずれの新薬メーカーも厳しい状況に置かれている。翻訳市場もまたしかりである。1990年代は医薬翻訳バラ色時代、2000年代はグローバル化による翻訳需要拡大時代、2010年以降は競争激化にひた走っている。単価が高いなんてとんでもない。

弊社への翻訳需要の半数以上は新薬開発に関わる。その他は、論文、マーケティング、広報などに関わる文書だ。和訳、英訳を問わず国内外の様々な文書を扱っているものの、価格へのプレッシャーやスピードへの要求により大型案件は影をひそめ、少量や短納期のものが増えるばかりなので現場は辛い。

以前は専門性に留意し、丁寧に仕上げるゆとりがあった気がするが、最近ではこだわる時間とコストをいただけない。新しい情報ばかりなのに、インターネットが便利すぎて、調べが足りない、とお叱りを受けることも多々。まさに調査と時間とのせめぎ合いだ。

時間、コスト、専門性へのプレッシャーは増大するばかりであるが、世界の動きだからプロである以上応えなければならない。

そんな中、翻訳者の方々にはいつも難題をお願いするので心苦しい。それでも弊社の翻訳者たちは、クライアントのニーズに向き合おうと必死で対応してくれるのが心強い。

翻訳者にとっては厳しいことばかりではない。参加できる学会はたくさんあるし、薬剤情報やガイドラインはすぐネットに公開される。高い専門書を購入する必要はないし、大学で専門的な勉強をしていなくても学習するチャンスはたくさんある。好奇心があり、患者を助けたいという高い使命感を持ち、言葉が好きで英語と日本語能力が高い人であれば挑戦が可能だ。

翻訳だけでなく、メディカルライティングも一つの可能性である。ライティングを通して、論文や新薬開発の目的やプロセスを理解することで翻訳文に磨きがかかるに違いない。

未来は明るいばかりではない。ただ、自分が関わった薬剤や医療機器が命を救ったニュースを聞くと心が躍る。やはり“やりがい”は大きい。翻訳者、クライアント、翻訳会社の皆が力を合わせて業界の発展に貢献したい。

Event Report

2014年度JTF定時社員総会基調講演

2014年度 JTF 定時社員総会基調講演

日　時●2014年6月10日（火）16：35～17：45
開催場所●アルカディア市ヶ谷（私学会館）
テーマ●「日本の翻訳産業の実態
　～第4回翻訳業界調査結果報告～」

KEYNOTE

講　師●JTF 翻訳業界調査委員会
廣瀬紀彦（JTF 理事）、井口耕二（JTF 常務理事）

報告者●目次 由美子（株式会社 シュタール ジャパン）

Tokyo 10 June. 2014

この度の基調講演の参加者には『2013年度翻訳白書 - 第4回翻訳業界調査結果報告書 -』が配布された。翻訳産業の実態を解明し、翻訳業界の存在意義を内外に示し、翻訳業界の地位向上を図ることを目的として実施された日本翻訳連盟（JTF）による翻訳業界の実態調査の結果がまとめられた冊子である。基調講演は第一部が廣瀬氏による「翻訳会社の部」、第二部が井口氏による「個人翻訳者の部」から成る二部構成にて、対象ごとの調査結果が報告された。両講師による報告は白書に掲載されている調査結果が淡々と紹介されるのではなく、ときに白書には掲載されていない色鮮やかなグラフがスクリーンに映し出され、より深い詳細が解説されることもあった。調査結果の読み解き方を指南する様相も伺え、翻訳業界が目指すべき未来が示唆されるような場面もあり、定時社員総会の基調講演として実にふさわしい内容になっていた。

井口 耕二
Koji Inokuchi

廣瀬 紀彦
Norihiko Hirose

第１部：翻訳会社の部

講師：廣瀬紀彦

全国の翻訳関連企業771社を対象とした当該調査では192社から有効回答を得た。20年度の回収率12%に比較すると、約2倍の有効回答率25%を取得したことになる。JTF のホームページのみならず、メールや郵便で対象企業に調査協力の依頼をしてウェブ調査を実施し、回答は FAX でも受け付けた。

◎ 翻訳売上の動向

17年度、20年度、25年度と比較すると売上が「3000万円未満」～「1億円未満」の会社の割合が増えているとの指摘があった。全体の比率として売上の小さい企業が増えてきたこと、増え方は緩やかになってきているものの翻訳売上高が増えたという企業が多いこと、そして1年後も受注増が見込まれていることなどが紹介された。「翻訳事業の売上高比率」を見ると「80%以上が翻訳事業」という企業が全体の約3分の1を占めている。「翻訳業以外の事業」については「通訳」が42.2%と群を抜いており、「人材派遣」の26.0%、「印刷」の18.2%が続いているとのことであった。

◎ 単価の動向

請求基準について、日英・英日ともに20年度の調査では「原文基準」と「訳文基準」の比率がほぼ半々であったが、25年度では3分の2近くが原文基準となっていること、英日では20年度に比較すると原文基準の単価は下がっているのに訳文基準は下がっていないように見受けられることが指摘された。「英日翻訳料金の原文基準の価格帯」は「11円未満」～「35円以上」までの幅があり、20年度に52.7%であった「23円未満」は25年度に80%に増加している。「日英翻訳料金の原文基準の価格帯」は「9円未満」～「23円以上」までの幅があり、20年度に65.5%であった「19円未満」は25年度に79.1%に増加している。25年度も含み、これまでの調査においては翻訳分野が一括されているため、今後の調査においては分野ごとの細かい調査が望まれるとの発言もあった。

◎ 組織構成

翻訳企業の組織構成は企業規模にかかわらず翻訳事業専従者の約7割が「翻訳者・チェッカー」と「コーディネーター／PM」に占められているとのこと。翻訳事業専従者が50人以上の大規模企業においてはチェッカーよりも PM が多い傾向が示されていると指摘された。

また、翻訳事業専従者数50人以上の大規模企業では登録翻訳者数は平均して約1600人以上を抱えていることも指し示された。

しかしながら、登録翻訳者数の10～15%にしか翻訳案件を依頼できていない様子も伺えるとの発言もあった。また「求める翻訳者像」には、「語学力と表現力」、「正確さ」、「専門知識」の順に並んでいることも紹介された。

◎ 取扱分野

「取扱分野」については「特許」と「コンピュータ」における減少、「医薬」や「科学・工業」の微増に触れるのみではなく、数値は少ないながらも「出版」が著しく大きな伸び率を示していることが強調された。取扱言語についても「ドイツ語」、「フランス語」、「イタリア語」などの減少を示しながらも、顕著に増加している「外国語から外国語」への翻訳には欧州言語が含まれている可能性について言及された。25年度調査からの新しい項目としてベトナム語を含む「他アジア言語」が加えられたことも紹介があった。

◎ その他

「翻訳支援ツール」については、導入状況ばかりでなく満足度の調査結果も示された。圧倒的に多く使用されているツールは SDL 社の「SDL Trados」であることが紹介された。

そして「スタイルガイド」についても、「発注元から支給されたスタイルガイド」および「自社作成のスタイルガイド」の使用率が高く見られたことが指摘された。

第2部：個人翻訳者の部

講師：井口耕二

今回の翻訳業界実態調査アンケートでは JTF として初めて個人翻訳者も対象としたことが紹介された。JTF および日本翻訳者協会（JAT）の会員に対して調査アンケートの案内がメールで通知され、Facebook や Twitter などのソーシャルメディアでも任意の呼びかけが実施されたことから、ウェブ調査での有効回収数は 429 人、JTF 個人会員の回収率は 33% という調査結果の信頼性に足る数字を得られたとの説明があった。

調査に協力した翻訳者の多くは 3 年以上の経験があり、40 代が中心であると示されていた。「取扱分野」が分散していることから、万遍なく多様な分野の翻訳者から回答を得られているとの解説もあった。登録翻訳会社数は「5 社くらいまで」が 5 割以上を占めていながらも、コンスタントに受注している翻訳会社は「1、2 社から」との回答が多かった。

◎ 単価の現況

「翻訳会社向け原文基準での英日翻訳単価」については回答の選択肢に「3 円未満」～「35 円以上」までが設けられていた。スタートレートには 8 円が設定される傾向があるとの前置きと共に、回答には「3 円未満」も「35 円以上」も見受けられるとの紹介があった。また、ソーススクライアントとの直接取引においても、翻訳会社向けと同じ価格帯が示されていると指摘されていた。

受注方法については「翻訳会社から」が 86.7% であるのに対し、「ソースクライアントから直接」が 38.2% と示されている（複数回答可で重複あり）。ソーススクライアントとの直接取引のきっかけについては、「知人の紹介」が 48%、「以前からの知り合い」が 43% と圧倒的な数値を示している。「営業」が 12.7% を示していることについては、翻訳会社の営業力の強みが感じられるとの指摘があった。「翻訳マッチングサイト」と「SNS 経由」がそれぞれ 8.6% を示していることについては、インターネット普及の効果が見られるとしながらも、意外に低い数値であるという印象をもったとの発言があった。

◎ 翻訳作業の状況

「翻訳以外の作業に対する報酬」に関しては PowerPoint のテキストボックス調整や、PDF 原稿に対する Word でのタイプおよびレイアウト調整作業について 66% の「報酬を受け取っていない」という回答に対して、請求しない翻訳者の責であるのかと翻訳業界のあり方を問う場面もあった。

また、調査結果は「翻訳外注」の比率が低いことも明確に示していた。しかしながら 2 割は翻訳を外注していることを示しており、6.8% は「50% 以上」を外注しているとの結果について、個人翻訳者へのアンケートであって翻訳会社の回答ではないはずだがという講師の困惑が伺えた。

平均しての翻訳者の 1 時間あたりの作業スピード（200～300 ワード）、1 ヶ月の労働日数（22、23 日）、1 日あたりの翻訳作業時間（5～9 時間）を紹介する際には、一般的な給与所得者は平均して月に 145.5 時間勤務し、18.9 日出勤しているという比較材料も提示された。1 ヶ月の労働日数に「26 日以上」が 21.4% を占めていることから、死亡した際には過労死認定を受けるくらい長時間労働を実施している翻訳者が多くいること、「15 日以下」が 21.4% いるなど、理由は明らかではないものの仕事量を自ら制限しているように思われる翻訳者がいることが浮き彫りとなった。

Tokyo 10 June. 2014

「日本の翻訳産業の実態 ～第4回翻訳業界調査結果報告～」

◎ 収入のレベルと内訳

25年度の総収入については「100万円未満」～「2000万円以上」までの幅があり、総収入に占める翻訳収入の比率は「80%以上」が68.6%であると指し示すも、回答者によっては「通訳」や「翻訳講師」を「翻訳」ととらえられている場合があるとの指摘と共に、実態調査の難しさも紹介された。

さらに、「翻訳による実収入（推測値）の分布図」をスクリーンに映し出し、外注分などを省いた翻訳のみの収入が図示された。 平均値（平均して得られる数値）: 380万円、中央値（全体の中央にくる値）: 340万円、最頻値（最も多く現れる値）: 300～400万円を示すのみならず、突出したデータが見当たらないことから信憑性のあるデータと考えられることを解説。

そして「収入分析」の解説においては、翻訳単価が5円未満または、1時間あたりの翻訳語数が200ワードでありながらも、年収600万円以上の翻訳者がいる旨も言及。収入を増やすためには作業スピードの高速化により分量をこなすべきか、品質向上により単価を上げるべきかという翻訳者の究極の質問を紹介。翻訳会社向けの英日単価および速度と収入を比較し、近似値や相関係数を示すグラフをもって、翻訳分量の多さよりも高単価が年収増加へつながる可能性が高い旨が解説された。

最後に、登録翻訳者に支払う翻訳代金の消費税を支払っていない企業があるとの指摘もあった。割合としては減少しているが、実数は減少してはいないことを強調されていた。

今回の講演内容は、2014年3月に発行した『2013年度翻訳白書－第4回翻訳業界調査報告書－』の一部です。印刷した『2013年度翻訳白書』は、JTF会員には無料配布され、非会員の希望者の方には有料（2,100円＋送料160円）でご提供いたします。ご希望の方はお早目に事務局までお問い合わせください。

廣瀬 紀彦
Norihiko Hirose

PROFILE

（株）インターナショナル・インターフェイス 代表取締役社長、JTF理事・翻訳業界調査委員
1990年NTT入社。1992年ドコモ設立とともに転籍。システム開発、事業計画、新規事業企画、マーケティング、国際投資、M&A、投資先管理と幅広い分野を経験。当初メンバーとしてiモードの仕様書を作成。1999年より米国シリコンバレーにてベンチャー投資提携責任者。2003年6月ドコモを退職し、技術投資提携コンサルタントとして、数多くの日米企業間の戦略投資提携、技術調査、マーケティング、ビジネス・コミュニケーションに携わってきた。スタンフォード大学、UCバークレーをはじめ招待講演多数。上智大学大学院修了。カーネギーメロン大学経営大学院にてMBA取得。

井口 耕二
Koji Inokuchi

PROFILE

技術・実務翻訳者、JTF常務理事・翻訳業界調査委員
東京大学工学部卒、米オハイオ州立大学大学院修士課程修了。子どもの誕生をきっかけに大手石油会社を退職し、技術・実務翻訳者として独立。最近はノンフィクション書籍の翻訳者としても知られる（『スティーブ・ジョブズ I・II』（講談社）、『ジェフ・ベゾス 果てなき野望』（日経BP）、『リーダーを目指す人の心得』（飛鳥新社）など）。高品質な翻訳をめざして日々、精進するかたわら、翻訳作業を支援するツールを自作・公開するなど、人とPCの最適な協力関係を模索している。翻訳者が幸せになれる業界の構築が必要だとして、日本翻訳連盟理事、翻訳フォーラム共同主宰など、業界全体を視野にいれた活動も継続している。

MISSION STATEMENT

「意外と知られていないフリーランス翻訳者の素顔をさぐる」ために始まったこのシリーズですが、丸2年経ってみると、フリーランス翻訳者の実態も「けっこう知られるようになってきた」ように思います。この間に、翻訳者の SNS 利用率もすっかり増え、Facebook などでもその日常は垣間見えるようになってきて、このコーナーの役目もちょっと一段落というところです。そこで、これからは、今までとできるだけ違う生活をしていそうな翻訳者にご登場いただこうと思っています。

そこでまず、今年度前半は、JTF ほんやく検定の1級合格者3人の最近の様子をうかがってみることにしました。

Column 01 Owner

高橋 聡
Akira Takahashi

PROFILE

CG 以前の特撮と帽子をこよなく愛する実務翻訳者。翻訳学校講師。学習塾講師と雑多翻訳の二足のわらじ生活を約10年、ローカライズ系翻訳会社の社内翻訳者生活を約8年経たのち、2007年にフリーランスに。現在は IT・テクニカル文書全般の翻訳を手がけつつ、翻訳学校や各種 SNS の翻訳者コミュニティに出没。

■ブログ「禿頭帽子屋の独語妄言」
http://baldhatter.txt-nifty.com/trados/

「半農半翻訳」はじめました

個人翻訳者
大久保 雄介

はじめに、このような素晴らしい機会を与えてくださったコラムオーナーの高橋様、および「ほんやく検定」を運営されている JTF 様に心からお礼申し上げます。ほんやく検定1級（英日、情報処理）合格を機にフリーランス翻訳者として本腰を入れ出した、まだまだ「あまちゃん」な私ですが、日々の暮らしについて少し書かせていただきたいと思います。

「半農半翻訳」というライフスタイル

「半農」というフレーズを聞いて、「農産物を出荷しながら翻訳も!?」と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、自然相手の農業を、片手間で商売としてこなすのは至難の業です。この場合の「農」とは、自給用の畑仕事を中心とした農作業を指します。ですので、同じような生活を送っている翻訳者さんは、他にもたくさんいらっしゃるかもしれません。「農」だけでなく、それとともにある田舎暮らしの良いところ、大変なところ、その両方を受け入れつつ、大自然とともに生き、かつ大好きな翻訳も続けたいという思いが、私の「半農半翻訳」生活を支えています。

人生を変えたWWOOF

「半農」に結びつく大きなきっかけとなったのが、オーストラリアでのワーキングホリデー中に参加した WWOOF（Willing Workers On Organic Farm、ウーフ）です。WWOOF とは、農作業を手伝う代わりに、ホストから食事と宿泊場所を提供してもらうプログラムのことです。農作業で流す汗、仲間との語り合い、野菜中心の健康的な食生活など、それまでとは180度違う生活を経験し、心も体も生まれ変わりました。帰国後も、できるだけ当時の生活リズムを維持しようと心がけています。

海外に出るまでのことについては、こちらの記事をご覧ください。
http://www.amelia.ne.jp/user/reading/flavor87_01.jsp

生活サイクルにおける「農」と「翻訳」のバランス

1. 春、秋

農と翻訳のバランスが最も良い時期。暑くも寒くもない時期なので、畑仕事は時間を問わず、翻訳の気分転換に行う。種まき、植え付け、収穫など、必要になったときに、合間を見て1～2時間の農作業。毎日発生するわけではなく、作物の成長をニヤニヤしながら見守るだけということもしばしば。翻訳作業は平均して9時～19時に6時間ほど。

2. 夏

バランスが農に偏る時期。寒冷地の長野といえども日中は暑いので、農作業は早朝か夕方。専業農家である友人の収穫手伝いが中心。4時半に起床して畑に直行、2～3時間の収穫後に帰宅してシャワーと朝食。翻訳作業を13時頃まで集中的に行い、昼食。ここで一度体力が切れるので、2時間の昼寝を挟む。目覚めたときは新しい一日が始まるかのよう。夕方は残りの翻訳作業と自宅の夏野

菜の収穫。翌朝に備えて22時には就寝。

3. 冬

バランスが翻訳に偏る時期。12～3月は雪に埋もれる地域なので、畑仕事はほぼ無し。運動はもっぱら雪かきと雪遊び（!?）。朝は毎日氷点下なので、起床は8時頃と遅め。翻訳作業は平均して10時～20時に7～8時間ほど。

田舎生活も楽じゃない

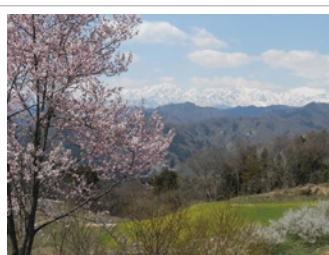
満員電車に揺られて深夜まで残業という生活に比べれば、悠々自適と言って良いかもしれませんが、四六時中縁側で茶をすすっているわけにもいきません。過疎化が進む田舎にとって、若者は重要な人手です。町内会に当たる「組」や「区」の役職、地域の草刈り、消防団の活動など、活躍する場はたくさんあります。つい先日も、村内で山火事が発生したばかりです。朝10時、村内に流れるサイレン。その日は納品日でしたが、人命には代えられません。出動です。実際、消防団に入ってまだ1年と少しの私にできることと言えば、スコップで火を叩いて燃え広がりを防ぐことぐらいでしたが、どの団員も仕事を中断して駆けつけているので、条件は一緒です。客先に納期延長をお願いするのは後からになってしまいますが、事情を説明すれば快く応じてくださるので助かっています。

また、村内では「英語ができる人」として、村の宿泊施設から「お客さんの通訳をしてほしい」と頼まれたり、英会話教室の手伝いをしたりすることもあります。会話の方はとても褒められるようなレベルではありませんが、少しでも役に立てるのは嬉しいものです。

良いこともたくさん

地域のために尽くした分だけ返ってくるものも大きいのが、ここでの生活です。嬉しいのは、ご近所からの野菜のおすそ分け。ゴーヤ10本やキュウリ50本（!?）など、気前が良すぎることもありますが（笑）。野菜の他にも、仕留めたばかりのイノシシや鹿の肉など、珍しいおすそ分けもあります。

近所のお年寄りは畑仕事の先生でもあり、時間を忘れて質問攻めにしてしまうこともありますが、お年寄りも地域が若返ったことを喜んでくれているようです。

そして田舎はやはり景色が良く、空気も澄んでおり、周囲も静かです（草刈機とチェーンソーの音を除けば）。翻訳に疲れたときは、妻と散歩に出て他愛もない話をしつつ、ときにはすれ違った人たちとおしゃべりをすることが最大の気分転換になっています。

村内の景色

欲張って仕事を取らない

消防などの地域活動は突発的に発生し、畑仕事も気候に左右されるため、翻訳の受注量は、基本的に前倒しで納品できる範囲にとどめています。余裕ができた場合は、前から行きたかった場所に妻と出かけたり、友人と食事したりするなど、できるだけその時間を仕事で埋めないよう心がけています。翻訳は大好きですが、何でも too much は良くありません。それこそフリーランスの特権を生かし、一杯のコーヒーをゆっくりドリップするぐらいの時間は常に確保したいものです。

パートナーの存在

野菜作りが趣味の私ですが、料理の腕はまだまだ人並み以下で、結婚後は妻に任せっきりです。野菜の旨味を生かし、「陰」と「陽」のバランスを考えた「重ね煮」と「酵素玄米」なるものが彼女の持ち味（だそうです）。身内自慢で恐縮ですが、健康を胃袋から支えてくれている妻には、この場を借りて感謝したいと思います。

今後の目標

「半農半翻訳」生活はまだまだ名前負けしており、農も翻訳もこれから経験を積んで、さらにレベルアップしていくつもりです。密かな目標は、コラムオーナーの高橋様から「A 評価」をいただくことです。

また、需要があれば、田舎暮らしを考えている翻訳者さんをサポートしたり、JTF の保養地として、この小川村をご活用いただけるようお手伝いしたりできればと思っています。小川村は、「日本で最も美しい村」の1つに選定されています（http://www.utsukushii-mura.jp/ogawa-index/）。

大久保 雄介
Ohkubo Yusuke

個人翻訳者。信州大学人文学部卒業後、都内の翻訳会社に約6年間勤務。2年間の海外生活（ニュージーランド、オーストラリア）を経て、2012年より故郷の長野県小川村にて本格的にフリーランス翻訳業を開始。忙しくも楽しい田舎暮らしの中、得意とするIT翻訳のほか、特許校正にも挑戦中。訳文にこめる「熱」を何よりも大事にする。畑仕事にも「熱」をこめるが、いまだ想いは届かず空回り（失敗続き）。

人間翻訳者の仕事部屋

MISSION STATEMENT

フリーランス翻訳者になり13年目に入りました。10年後、20年後の翻訳者としてのキャリアを模索し、いろいろな方のお話を伺ってきました。向こう10年、20年、30年の翻訳者としてのキャリアプラン、ライフプランを立てる上で、業界で活躍されている翻訳者の方々のお仕事ぶりを拝見したい、と思い、このコラムでは、2000字、翻訳、というお題に対して映し出される「人間翻訳者」の方々の「仕事部屋」を拝見したいと思います。皆さん方の「機械翻訳」に負けない「人間翻訳者」としてのキャリアの一助となれば幸いです。

はじまりは気づかぬうちに

翻訳者
北川知子

数か月前、柴田耕太郎門下生研究会で、本コラムのオーナーである矢能千秋さんとお会いした。講師の矢能さんからは、主に産業翻訳にまつわるお話をいろいろ聞かせていただいた。なかでも印象深かったのは、「自分にはとてもムリ」と思うような依頼が来たときでも、すぐに断るのではなく、「はい、やります！」と積極的にやってみよう、というアドバイスだった。日頃、「でも〜、だって〜」と、とかく尻込みしがちな私には耳の痛い言葉でもあった。

というわけで、「はい、やります」と威勢よく返事をしながらも、翻訳者の方々を前にいったい何を書けばいいのやら、と頭を抱えている。ご挨拶代わりに自分のことを少しお話しすることでお許し願いたいと思う。

「翻訳者」と名乗るようになってから、今年で6年目になる。経営、ビジネス、歴史、教育、心理学などを中心にノンフィクションの出版翻訳を手がけている。大学を卒業した頃には自分が翻訳者になる日が来るなど想像もしなかったが、あらためて振り返ってみると、いくつかの節目となる出来事があり、それが自分でも気づかぬうちに「現在」につながっているように感じる。

大学では社会学を専攻し、卒業後、国立国会図書館に入館した。25年の在職中は主にレファレンス部門で勤務、いわゆる司書の仕事で、何かを調べたい人に対して、図書館の資料を使って答えをみつけられるよう手助けをする。聞かれたことに答えるだけではなく、あらかじめいろんなテーマに即し

朝の散歩コース。運動不足になりがちなので、できるだけ歩くようにしています。いつか走れるようになるのが目標です。

Column 02 Owner
矢能千秋
Chiaki Yano

PROFILE

University of Redlands卒。サイマル・アカデミー翻訳者養成コース本科（日英）修了。NPOえむ・えむ国際交流協会（代表：村松増美）事務局を経て、現在フリーランス13年目、JAT会員9年目。JATではアンソロジー委員会、SNS管理委員会、ウェブサイト･コンテンツ委員会に所属。NESとペアを組み、スピーチ、ウェブコンテンツ、印刷物、鉄道、環境分野における日英・英日翻訳に従事。2012年よりサン・フレアアカデミーにてオープンスクール講師も務める。

■ Twitter: @ChiakiYano
■ブログ：http://chiakiyano.blog.so-net.ne.jp/
■ http://jat.org/translators/4596

て調べるツールを用意するのも仕事の一部だった。

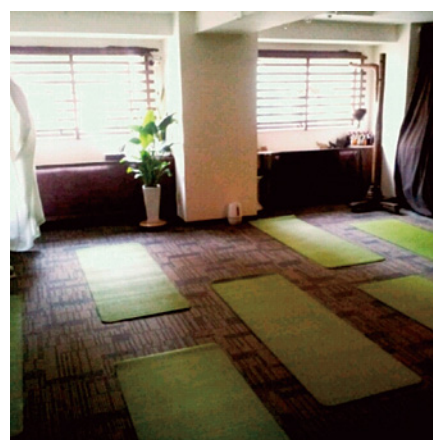
図書館で働いていたことが、翻訳という作業をする過程で何か役立っているのだろうかと考えることがある。もしかすると「調べもの」をするときに無意識にやっていることもあるのかもしれないけれど、正直よくわからない。私自身がノンフィクションの翻訳者として図書館を利用するのは、参考になる本を借りるときと引用箇所を確かめるときが多い。役立ちそうな本は購入するが、さすがに全部買うわけにもいかないので、近隣の図書館をよく利用する。引用箇所の確認については、国会図書館の資料の郵送複写サービスをときどき利用する。ノンフィクションでは、著者によっては引用が多く、しかも引用された箇所を読んだだけではいまひとつわからないことがある。邦訳があればもちろんそれに頼るが、なければ原論文を入手し前後をたどる。

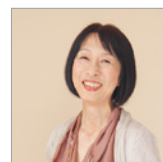
1998年から2000年までの2年間は、アメリカの国立公文書館でUSCAR（琉球列島米国民政府、沖縄が占領されていた時期のアメリカの統治機関）文書の整理に携わった。わずか2年であっても、外国で生活し、街の風景や匂い、そこに暮らす人たちの日常を肌で感じられたのは得難い経験だった。

帰国後、なんとなく思い立って（本当になんとなく、としか言いようがないのだが）翻訳の勉強を始め、やがて柴田耕太郎先生の英文教室に通い始めた。英語と言えば受験英語、それさえおぼろげな記憶になっていた私にとって、この時期に英文を丹念に読み解く訓練ができたことは大きな収穫になった。冒頭で触れた卒業生の研究会は、編集者、翻訳者、エージェントなどさまざまな講師から学べる場であると同時に、情報交換、交流の場でもある。とかく引きこもりがちな身には月に一度の集まりがとても楽しみだ。

2006年頃には山岡洋一さんの「古典翻訳塾」で学ぶ機会を得て、一年あまり「ミル自伝」と格闘した。J. S. ミルの文章は私にはとてもむずかしく、毎回課題を提出するのに必死だったのを思い出す。山岡さんから学んだことは言葉では言い尽くせないほど多い。

このとき共に学んだ村井章子さんに声をかけていただき、2年ほど前からアダム・スミスの『道徳感情論』に取り組んでいたが、今年4月、ようやく形にすることができた。古典には当然ながら過去に出版された邦訳書があり、複数あれば使われている訳語が異なる場合もある。時代を経た結果、現代の私たちがほとんど使わなくなっている言葉もあれば、意味が変わっている言葉もある。訳語の選択にはとても悩まされたが、村井さんが「訳者あとがき」で書いておられるように、「できるだけ普通の言葉」で、というのが当初から目指したところだった。なお、今回訳したペンギン版の原書に収録されているアマルティア・セン教授の序文は、以下のサイトでご覧いただける。ご参考までに。
http://business.nikkeibp.co.jp/article/book/20140418/263096/

「ねえねえ、どんなお仕事してるの？」と五歳の子供に聞かれたら何と答えますか、と聞かれたことがある。「本を書いた人と、それを読みたい人の橋渡しをする仕事」と答えながら、ふと思った。ああ、私はずっとそれをやっているんだ、と。公務員とフリーランスでは働き方はまったく違う。それでも図書館で働いていたときにも私がやっていたのは、本を書いた人とそれを読みたい人をつなぐ仕事だった。どうやらやっていることは変わらない。自分でも気づかないうちに、翻訳者としての今は始まっていたのかもしれない。

週一回の早朝ヨガレッスン。まだ一年ほどですが、少しずつ身体が変わってきたように感じます。

北川知子
Tomoko Kitagawa

翻訳者。奈良女子大学大学院修士課程（社会学専攻）修了。国立国会図書館勤務を経て翻訳業に従事。訳書にモリス『人類5万年　文明の興亡』（筑摩書房）、ムン『ビジネスで一番、大切なこと』、オニール『次なる経済大国』（ダイヤモンド社）、共訳書にアダム・スミス『道徳感情論』（日経BP社）、ルービニ『大いなる不安定』（ダイヤモンド社）など。

メール：ktgw1389@gmail.com
訳書一覧：http://booklog.jp/users/yakusyo

MISSION STATEMENT

「翻訳横丁の表通り」には色々な人々が往来するようになりました。

このコーナーでは、翻訳者さん達に「翻訳横丁の表通り」に出店して頂き、自身が持つ翻訳への「こだわり」を記事にして頂きます。「想い」であったり「ツール」であったり、「翻訳方法」であったり「将来の夢」であったり、何が飛び出るかは執筆者の翻訳への「こだわり」次第。ちょっと立ち寄って、覗いていきませんか？

Column 03 Owner
齊藤貴昭
Takaaki Saito

PROFILE

電子機器メーカーにて開発／製造から市場までの品質管理に長年従事。5 年間の米国赴任から帰国後、社内通訳・翻訳者を6 年間経験。2007 年から翻訳コーディネータ兼翻訳者として従事。「翻訳者 SNS コーディネータ」として業界活動に精を出す。ボタリングが趣味。甘いもの好き。Twitter や Blog「翻訳横丁の裏路地」にて翻訳に関する情報発信をしています。

■ Twitter：terrysaito
■ Blog：http://terrysaito.com

こだわりのない翻訳者のこだわり

実務翻訳者
中野 真紀

実践的な知識も経験もないままいきなりフリーランスで翻訳の仕事を始め、手探りの数年間を経てようやく軌道に乗ったかと思えた矢先に起こった世界金融危機。仕事にも大きな影響があり、厳しい数年間をなんとか乗り越えようやく方向性を定めたつもりが、気がつけば予定とはずいぶん違う分野の仕事をこなす日々。そんな私に「翻訳へのこだわり」について語る資格があるとはとうてい思えないのですが、せっかくお声掛けいただいたので、あまりこだわらずに仕事を受けてきた翻訳者である私のささやかなこだわりについてしぼりだしてみたいと思います。

もともと何の専門分野もない独日翻訳者としてスタートしたため、これまで多種多様な仕事をこなしてきました。ここ数年で割合が大きく増えてきた英日翻訳については、専門性を高めるために分野を限定しようと思ってはいるものの、ドイツ語案件をきっかけに仕事をいただくことが多いため、これまた多様な分野の依頼があります。翻訳を通していろんな世界のさまざまな知識に触れられることがこの仕事の楽しみのひとつでもあるので、依頼があればどんな分野でも、という姿勢でやってきました。

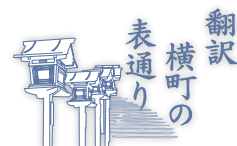
こうして多分野の翻訳をするにあたって思考の枠組みとして役立っているのが、意外にも大学時代に所属していた広告研究会で学んだ、広告の「対象」、「媒体」、「コンセプト」について考えるというステップでした。翻訳をされている方にはごく基本的なことだとは思いますが、この機会に自分なりにまとめてみたいと思います。

これを翻訳に応用すると、次の2つの視点から考えることができます。

1. 原稿は「いつ、誰が、誰を対象に、何を目的として、何の媒体で」作成したか。
2. 翻訳は「誰が、誰を対象に、何を目的として、何の媒体で」使うのか。

これは、ニュース記事を書くときの基本とされる、いわゆる「5W1H」にも似ています。「媒体」の代わりに、または追加的に、「どこで」についても考える必要がある場合もあるでしょう。そして、翻訳は基本的に訳出後あまり時間をおかずに使われますので（数年寝かされることもたまにありますが）、「いつ」については通常は考えなくても良いように思います。

対応分野が狭ければ狭いほど、これらはだいたい一定なので、毎回深く考える必要はないのですが、さまざまな分野の仕事を受ける場合は、翻訳を始める前、または仕事を受ける前に、まずこれをきちんと把握することが重要となります。

契約書や使用説明書、Web サイトの翻訳など、1と2がほぼ同じで明確なものもありますが、最終利用者が同じでもクライアントの好みによって言葉の使い方など

が変わってきますので、2の「対象」では、最終利用者とクライアントが異なる場合には、その双方について意識する必要があります。

これに対し、1と2が大きく異なり、また2もそのときどきで異なるものの一例として、インタビュー音声の翻訳があります。例えば「テレビ番組で一部のみを使用する」場合と、「冊子にそのまま全文掲載する」場合とでは、仕上がりの翻訳がかなり異なってきます。前者では、どちらかというと中間利用者（ディレクターなど）の使いやすさを重視し、細かくタイムコードを付け、後で編集しやすいようにできるだけ話の流れ通りに忠実に訳していきます。一方後者では、読者の読みやすさを考え、意味やニュアンスがずれないようにしつつも冗長なくり返しなどは省き、全体の流れを見ながらすんなり読めるように訳していきます。

文体の好みも含め、こうしたことは事前にクライアントに確認できれば良いのですが、エージェント経由の案件で、あまりそうしたことを気にせずに仕事を発注される担当者さんにあたると、その辺りを尋ねることができなかったり、尋ねてもわかりませんと返されてしまうことがあります。その場合は自分なりにおおまかに想像し（きっちり定めすぎると見当違いのものができあがる危険もありますので）翻訳するだけでも、全体としてゆれのないものに仕上がるように思います。

さて、依頼があればどんな分野でもとはいいつつも、まったく未知の特殊な専門分野については、私なりの対応可否の判断基準があります。その第一の基準は、「クライアントの希望する期限内に私より上手に翻訳できる人が見つかりそうか否か」というものです。

産業翻訳である以上、通常は何らかの目的で比較的短い期間に翻訳が必要とされます。特にドイツ語であれば翻訳者の数も限られていますので、どうしても急いで必要なのに翻訳してくれる人が見つからない、というのでは困るでしょうから、それなら微力ながらも協力してあげたいという気持ちがあるからです。

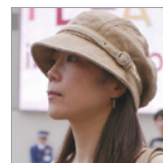
見つかりそうにないと思える場合には、次の判断基準として前述の特に2を確認します。例えば専門業者向けのパンフレットにそのまま使用する（しかも翻訳をチェックできる人がいない）などと言われれば、実力不足を理由にお断りしますが、内容確認のための社内資料などであれば、当該分野および類似分野に関する自分の知識と経験を伝えた上で、それでも良ければとお受けすることも少なくありません。

翻訳に携わった書籍も分野はさまざま

もちろん受けたからには、時間のある限り納得のいくまで調べます。手元に資料のない分野で時間的な余裕がない場合は特に、玉石混淆のインターネット上での調べ物が多くなりますが、その際にも、サイトの信頼性を見極めながら、参照している記事が原文なのか翻訳なのかの確認と合わせて、その記事における前述の1と2をつねに意識し、使われている用語や言い回しが今回の翻訳に使えるかどうかを判断していきます。

そうしてなんとか納得のできる翻訳にまで仕上げて納品するわけですが、悪いフィードバックがなくても、やはり不安は残ります。正確で読みやすい翻訳を納品して当たり前の仕事ですから、慣れない分野に四苦八苦して仕上げても、よく頑張りましたと言われることはありません。

ですから、同じクライアントから継続して声がかかり、前回と同じようにと言われたときには、とても嬉しく思うとともに本当にほっとします。そんなふうに、苦しんだり落ち込んだり小躍りしたりをくり返しつつ、いろんな世界を垣間見ることができるのを楽しみながら、また新たな分野に挑むのです。

中野 真紀
Nakano Maki

独日・英日翻訳者。石川県出身。獨協大学外国語学部ドイツ語学科卒業後、海外向けマニュアルのDTPオペレーターとして勤務したのち、翻訳者を目指して渡独。1999～2002年にボン大学のドイツ語コースおよびアジア言語研究所（SOS）でドイツ語と独日・独韓翻訳を学ぶ。帰国後フリーランスで翻訳の仕事を始め、さらに派遣社員として製薬会社の臨床部門にて翻訳関連業務を行う二足のわらじ生活を2年間続けたのち、2005年より専業翻訳者となる。JAT会員。

WordSmyth Café

MISSION STATEMENT

WordSmyth Café は、翻訳に関わるさまざまの人々が集う「誌上カフェ」です。当コーナーでは、毎号異なる執筆者にご登場願い、翻訳を含む言語に関わるさまざまなテーマを取り上げます。名前の WordSmyth（ワードスミス）は、wordsmith（言葉の職人）と myth（神話＝お話）を組み合わせた造語です。「言葉の職人として、さまざまな物語を紡ぎたい」という店主の願いを表しています。

明治時代の一般大衆向け科学翻訳と科学読み物

東京工業大学・大学院博士課程後期
アミール 偉

「科学翻訳」と聞くと、みなさまは何を思い浮かべるでしょうか？私達が普段、科学で用いている言葉の多くが、オランダ語の翻訳から作られたことをお話しすると、驚かれる方が多いです。実は、日本における科学翻訳の歴史は古く、大陸からもたらされた東洋科学は1000年以上前から翻訳されています。それらの翻訳は、漢文に訓読点と「て・に・を・は」などの助詞を付けるというものでした。

西洋科学の翻訳は、徳川幕府8代将軍の徳川吉宗が享保期に「漢訳洋書」の輸入を緩和した後から本格的に始まり、今年は杉田玄白らが『解体新書』を翻訳・刊行して、ちょうど240年にあたります。西洋の言語（主にオランダ語）の翻訳は、漢文の翻訳と比べると非常に難しく、当時の蘭学者にとっては、翻訳を行う際に初めて聞く「物」や「概念」を翻訳することも多々ありました。『解体新書』（医学書）や『舎密開宗（せいみかいそう）』（化学書）といった書物で、オランダ語から翻訳された言葉の中には、現在私達が使う言葉が多く残っています。表1に、私達が中学や高校の「生物（医学）」や「化学」で学ぶ元素の名前の由来を示します。

西洋科学の知識や概念は、武士や蘭方医などの一部の知識階級層では広まったものの、一般大衆にとっては、まだほとんど触れる機会のない学問でした。しかし明治維新が起こった1868年、慶応義塾大学の創設者である福澤諭吉は、一般大衆向けの科学読本である『訓蒙窮理図解』を翻訳・刊行します。これはオランダ語ではなく、英語の科学や地理の教科書を原書とした、一般大衆向けの翻訳科学書です。科学史研究家の板倉聖宣博士はこの書を「科学読み物」と表現しています。この「窮理」という言葉は当時、幅広い範囲で西洋科学を表す言葉でした。福澤諭吉は全集緒言の中で、『訓蒙窮理図解』について、以下のように述べています。

種々様々の物理書を集めてその中より通俗教育の為めに必要なりと認るものを抜抄し、原字原文を余処にして唯その本意のみを取り、恰も国民初学入門の為めに新作したる物理書は窮理図解の三冊なり。

福澤は、これからの国民の教育にとって、「西洋科学」が大変重要なものだと強く認識していました。彼の翻訳方法もそれまで発刊された翻訳科学書とは異なり、非常に興味深いものがあります。では、実際に福澤諭吉の科学翻訳を見て行きましょう。表2に、西洋科学を扱う原書と2つの翻訳例を示します。

表1　化学で用いられる元素記号の例

	原語（オランダ語）		訳語（日本語）
医学	beenlieves	been（骨）＋ lieves（膜）	骨膜
	verlangdemerg	verlangde（延びた）＋ merg（髄）	延髄
	twaalfvingerigendarm	twaalf（十二）＋ vingerigen（指の複数形）＋ darm（腸）	十二指腸
化学	Zuurstof	Zuur（酸） ＋ stof（素）	酸素
	Waterstof	Water（水） ＋ stof（素）	水素
	Koolzuur	Kool（炭） ＋ zuur（酸）	炭酸

Column 04 Owner

遠田和子
Kazuko Enda

PROFILE

日英翻訳の傍ら翻訳学校での講師、またプレゼン研修の講師をしています。著書に、「英語なるほどライティング」、「Google 英文ライティング」、「e リーディング英語学習法」、「あいさつ・あいづち・あいきょうで3倍話せる英会話」（講談社）があります。趣味は読書・映画・旅行です。また英語スピーチの練習、バレエのレッスンを続けています。それぞれ少しでも上手くなるため、地道に努力しています。

＊ Website：WordSmyth 英語ラボ
http://www.wordsmyth.jp
＊ Facebook Page：WordSmyth
http://www.facebook.com/wordsmythlab
＊ e-reading ブログ：One Chapter Reading Club
http://minamimuki.com/fun-and-free

原書はWilliam & Robert Chambersが編集した*Chambers's Educational Course, Natural Philosophy*内にある気象学（Meteorology）から抜粋した一文であり、内容は降雪についてです。1876（明治8）年に、百科全書の一部『気中現象学』として発刊された中では、表2の真ん中に示すように翻訳されています。これを読むと、当時の漢文調の翻訳をはっきりと感じ取ることができるかと思います。また、科学的な事実のみを示し、余分なことは一切書いてありません。西洋科学の翻訳は、江戸時代からこのような形が主流でした。

次に福澤諭吉の翻訳を見てみると、いくつか興味深い点が見えてきます。彼の翻訳では、出来る限り漢文調を排除して、滑らかな日本語の文体（福澤の言う「俗文」）を用いています。これは、「翻訳文を読む人は、原文を読むことができない人であるから、そのような読者が読めるものを書くべきだ」という福澤の強い想いが現れていると言えるでしょう。福澤の翻訳への想いや彼が『訓蒙窮理図解』を対象とした読者は、全集緒言からもよくわかります。

行文の都合次第に任せて遠慮なく漢語を利用し、俗文中に漢語を挿み、漢語に接するに俗語を以てして、雅俗めちゃめちゃに混合せしめ…唯早分りに分り易き文章を利用して通俗一般に広く文明の新思想を得せしめん…乃ちこの趣意に基き出版したるは西洋旅案内、窮理図解等の書にして、当時余は人に語りて云く、是等の書は教育なき百姓町人輩に分るのみならず、山出の下女をして障子越に聞かしむるもその何の書たるを知る位にあらざれば余が本意に非ず…

また彼は、当時の日本社会に広く存在した「学問は漢文に由来する」という風潮に対しても異議を唱えています。「漢文は文意を解するに難し」と言うように、明治維新に伴う西洋科学の新たな思想をいち早く大衆に対して提示しようとした結果、俗文体の記述になったのでしょう。次に興味深いところが、「花の如くなりて地に降る」という部分に見られるように、比喩（この場合は直喩）を用いているところです。このような比喩表現は、この『訓蒙窮理図解』で様々に使われています。その例を表3にまとめました。

ここに見られるように、福澤は翻訳の中に様々な比喩表現を用いながら、西洋科学の説明を行っています。このような比喩表現は、西洋科学を初めて学ぶ子供たちにとっては、その状況が頭の中で想像しやすく、非常に有効だったと考えられます。また、原書には比喩のような表現はほとんどなく、福澤が独自に付け加えたものと推察することができます。

挿絵を見ても非常に興味深い点が見て取れます。そこには「科学者」のような人物は描かれておらず、一般男性、子供、そして着物を着た女性が描かれています（具体例はWeb版参照）。当時の科学書に、このような一般大衆が描かれていたのは非常に稀であり、学術的な匂いがしない板倉の言う「科学読み物」として機能していたと考えられます。

このように、『訓蒙窮理図解』では文章や挿絵の点などから、「西洋科学」を特別で高尚なものとして翻訳せず、あくまで大衆の視点から触れられる形式で翻訳されました。このような書物は、『訓蒙窮理図解』発刊後の明治5（1872）年に大量に発刊され、一大ブームを巻き起こしました。西洋科学を一般大衆へ導入する先導役を引き受けたのが、福澤諭吉だったのです。そしてこのような記述法は、現代の子供達が目を輝かせて読む科学読み物にも、脈々と受け継がれています。

表2　西洋科学を記述した原文と2つの翻訳文

原書	When the temperature of the stratum of air from which the rain fall is under 32°, the vapour or clouds must necessrily be frozen, and the descending particles will be snow instead rain.
百科全書	若し雨の由りて来れる大気層の温度三十二度以下にある時は其の雨となるべき蒸気即ち雲は凝凍せざるを得ず。而して、其降る者は雨に非ずして雪となるべし。
訓蒙窮理図解	雲の化して雨とならんとするとき、空気の気、寒くして三十二度より下なれば、其雲は雨とならずして凝結り、花の如くなりて地に降る。これを雪といふ。

表3　福澤の用いた比喩表現（一部）

種類	章	示される内容	比喩表現
日常の科学	1	熱の直進	糸のように真っ直ぐに来たるものゆへ、
	2	充満する空気	恰も河海の魚の游ぐが如くなり。
	5	水の循環	恰もこの世界は大仕掛の蒸露罐と思うべし。
	6	雪の降り方	花の如くなりて地に降る。
天体関連	7	物と地球の大きさの比較	九牛が一毛にも足らず。
	8	地球の形	毬の如く橙実の如し。
	9	地球の自転と公転	独楽の舞ながら行燈の周囲を廻るが如し。
	10	日食	日と月と世界と、団子を串さしたる如く、

Writer Profile

アミール 偉
Isamu Amir

1985年東京生まれ。父親がシリア人、母が日本人の家庭で育つ。日本国籍。東京都立戸山高等学校から、東京工業大学へ進み、2010年に東京工業大学大学院修了（工学修士）。2012年に英国ケント大学大学院修了（理学修士）。小・中・高校での非常勤講師（理科・化学）などを経て、現在は東京工業大学、大学院社会理工学研究科、人間行動システム専攻の博士後期課程に所属。専門は科学翻訳、科学コミュニケーション、理科教育。東工大では、2008年に英国ロンドンの科学博物館、2012年には英国議会科学技術室でのインターンシップ生にそれぞれ選ばれ、科学技術と教育、社会、そして政策が関わり合う現場を経験する。それらの経験を活かし、現在は自身の研究の傍ら、東工大近隣の小学校で親子参加型の科学教室を開催し、未来の科学者を育てている。

第60回JTF＜ほんやく検定＞合格者発表

平成26年1月25日（土）に実施された「第60回 JTF ほんやく検定」の結果が発表されました。

実用レベル・英日翻訳

1級（1名）

望月　香（神奈川県）

2級（7名）

柳生　智子（東京都）
金子　奈美（埼玉県）
荻野　雅史（東京都）
奥村　桃子（海外）
渡邊　健（東京都）
矢島　有記（東京都）
長谷川　新（兵庫県）

3級（60名）

（非公開：18名）
飯島　功樹（茨城県）
澤　守之（千葉県）
田中　文子（海外）
新保　紫（北海道）
今泉　辰也（東京都）
水本　智子（兵庫県）
十川　恵美（東京都）
今瀬　佳介（東京都）
平井　ナタリア恵美（神奈川県）
辻　秀俊（千葉県）
澤田　麻規子（大阪府）
渡邊　有基（愛知県）
笠川　梢（京都府）
稲塚　利江（岡山県）
小野　広智（福岡県）
高野　泰彦（福岡県）
甲斐　康一（千葉県）
安楽　哲郎（東京都）
大槻　朝（宮城県）
石村　高子（神奈川県）
菅　愛里紗（東京都）
河出　真美（大阪府）
田中　幸（東京都）
大場　由希子（北海道）
寺澤　瑞保（東京都）
村越　由香（神奈川県）
篠原　大司（静岡県）
松下田　みゆき（愛知県）
料治　弦太（神奈川県）
横田　沙耶（千葉県）
永島　靖夫（東京都）
佐々木　康子（海外）
平田　光（石川県）
花嶋　みのり（千葉県）
片岡　真伊（東京都）
八村　いずみ（神奈川県）
ゼノビッチ　美奈子（東京都）
清水　直人（東京都）
浦岡　治美（東京都）
長岡　信一郎（東京都）
小林　千鶴（千葉県）
茶山　比呂司（東京都）

実用レベル・日英翻訳

1級（4名）

（非公開：2名）
近藤　和弘（山形県）
三浦　朋子（埼玉県）

2級（9名）

（非公開：4名）
服部　真弓（東京都）
日下部　健一（カナダ）
奥村　桃子（U.S.A）
山口　朋子（U.S.A）
清水　邦夫（茨城県）

3級（47名）

（非公開：15名）
飯島　功樹（茨城県）
御友　綾（愛知県）
石倉　克真（神奈川県）
ラフィディナリブ　エリズファビエン（長崎県）
クスタース　ハロルド（福岡県）
今泉　辰也（東京都）
笹　みゆき（U.S.A）
江口　詩織（東京都）
大久保　雄介（長野県）
渡邊　有基（愛知県）
重友　亜希子（千葉県）
荻野　雅史（東京都）
川口　真由（神奈川県）
河野　知子（東京都）
松岡　香里（大阪府）
河出　真美（大阪府）
石巻　賢作（東京都）
横野　健（東京都）
古田　恵（兵庫県）
河上　恵美（兵庫県）
井原　久美（兵庫県）
ローゼンバーグ　ジョシュア（U.S.A）
伊藤　直樹（U.S.A）
佐藤　龍彦（兵庫県）
吉岡　悟（京都府）
石井　達也（京都府）
藤盛　聡子（東京都）
山本　真照（埼玉県）
片岡　真伊（東京都）
浦岡　治美（東京都）
湯田　亜里沙（宮崎県）
ブルキ　ミカエル（東京都）

基礎レベル

4級（45名）
（非公開：17名）
ギアーズ　エリーシャ（埼玉県）
小島　裕範（大阪府）
橋村　吾土子（東京都）
山本　真佑花（兵庫県）
澤田　麻規子（大阪府）
米谷　壮司（大阪府）
馬庭　明日己（兵庫県）
ストライマス　薫（カナダ）
中村　光恵（京都府）
前田　愛美（北海道）
柏村　めぐみ（神奈川県）
松浦　菜穂子（岩手県）
瀧口　實（北海道）
内田　三恵（佐賀県）
神谷　めぐみ（東京都）
豊田　豊（東京都）
寺澤　瑞保（東京都）
クラーク　みどり（U.S.A）
荒川　恵美（愛知県）
米井　実（兵庫県）
佐藤　薫（東京都）
原田　美香（東京都）
柳　帆乃（兵庫県）
谷口　凜（福岡県）
伊東　美由希（千葉県）
酒井　信（東京都）
石毛　愛佳（千葉県）
山口　翔子（神奈川県）

5級（52名）
（非公開：20名）
ログンザック　加代（オーストラリア）
橋村　吾土子（東京都）
澤田　麻規子（大阪府）
井上　大剛（東京都）
真栄里　孝也（沖縄県）
米谷　壮司（大阪府）
馬庭　明日己（兵庫県）
遊免　尚美（三重県）
納富　和己（愛知県）
前田　愛美（北海道）
柏村　めぐみ（神奈川県）
松浦　菜穂子（岩手県）
瀧口　實（北海道）
板倉　毬詠（東京都）
増田　英莉（静岡県）
神宮司　志穂（東京都）
小原　健一（埼玉県）
山口　朗（東京都）
内田　三恵（佐賀県）
安達　純子（東京都）
和田　芳文（岡山県）
相浦　隆祝（東京都）
クラーク　みどり（U.S.A）
荒川　恵美（愛知県）
寺林　晴美（U.S.A）
楠本　宏正（神奈川県）
徳山　めぐみ（滋賀県）
上杉　あすか（滋賀県）
谷口　凜（福岡県）
酒井　信（東京都）
石毛　愛佳（千葉県）
山口　翔子（神奈川県）

第60回JTF＜ほんやく検定＞
1･2級合格者プロフィール

2014年1月25日（土）に実施されました第60回 JTF ＜ほんやく検定＞で、
1・2級に合格された方々のプロフィールをご紹介します。項目は以下の4つです。
①得意な分野と言語は？
②現在のお仕事は？
③学歴・職歴と翻訳の実務経験は？
④翻訳依頼時の制約条件・希望条件は？

合格者への連絡先は、
「検定合格者リスト
（JTF 会員専用サイト）」
http://www.jtf.jp/user/u_0101.do
をご覧ください。

望月 香（もちづき かおり）
実用レベル・英日翻訳・政経・社会1級合格
神奈川県在住
①法務文書全般。2014年現在は英日のみですが日英もお引き受けしたいと自主学習中です。
メディカル翻訳の講座にも通い始めました。
②フリーランス翻訳者
③法学部卒業後、法務部で契約書の翻訳やドラフティングを含む業務に従事し、その後派遣翻訳者を経て2010年からフリーランスに専念しています。
④翻訳会社様からのご依頼は大歓迎です。英日は1日2000ワード、日英は1日3000文字可能です。週末もご相談ください。

三浦 朋子（みうら ともこ）
実用レベル・日英翻訳・医学・薬学1級合格
埼玉県在住
①医学・薬学全般。英日・日英とも可能です。
②フリーランス翻訳者
③東京外国語大学英米語学科卒業。新聞社等数社に勤務した後、医薬専門の翻訳会社に翻訳者として約4年間勤務。2013年からフリーランス翻訳者。
④翻訳会社からのご依頼に応じることができます。休日や急ぎの案件についても可能な限り対応いたします。

近藤 和弘（こんどう かずひろ）
実用レベル・日英翻訳・科学技術1級合格
山形県在住
①電気電子工学、コンピュータ全般、科学技術
②大学教員、時間外でフリーランス翻訳者
③大学は理工学部で電気工学（電子通信）修士。以降総合電機メーカー、外資系半導体メーカー、ならびに米国本社勤務後、国内大学教員に赴任。論文博士（工学）取得、電気工学分野（通信ネットワーク）。翻訳はまだ駆け出しで、今後徐々にフリーランス翻訳家へ移行予定。
④2014年現在、当面休日と夜間、週3000から5000英単語程度を目標としたいと思います。日英、英日どちらも可。

矢島 有記（やじま ゆうき）
実用レベル・英日翻訳・情報処理2級合格
東京都在住
①2014年現在の業務の大半は IT 系の翻訳です。このほか、金融・保険分野や、契約書なども担当しています。いずれも英日です。ほんやく検定では現在、特許1級、政経社会2級、情報処理2級、医学・薬学3級（すべて英日）を取得しています。情報処理2級の合格は今回が2度めとなります。
②翻訳会社内の社内翻訳者として主に IT 系の翻訳に従事しています。
③2014年現在29歳。大学は商学部で経済学史を専攻しました。塾講師や翻訳会社内のチェッカー勤務などを挟んだため量の上下はあるものの、23歳から現在に至るまで翻訳実務に携わっています。現在多い分野は①に挙げたとおりです。特許は英日1級を取得しましたが、現時点では受注の予定はありません。
④休日のみであれば対応が可能です。委細はお問い合わせください。

服部 真弓（はっとり まゆみ）
実用レベル・日英翻訳・科学技術2級合格
東京都在住

①社会・世界情勢・金属・製造・ソフトウェア仕様書の日英・英日
②フリーランス翻訳者 http://www.hatomayu-honyaku-translation.net/
③大阪外国語大学卒業後、約10年間機械メーカーに勤務し、海外子会社との窓口業務に従事していました。特に、紙幣受け取り機のソフトウェア開発依頼を取りまとめる支援業務に多く携わり、紙幣読み取りに関する技術文書や通信仕様書の作成・翻訳の経験があります。半年程前に退職し、翻訳家を目指して勉強を始めました。2014年現在33歳。
④受注可能です。2014年4月時点で、1週間に翻訳可能な量は、難易度高め日英で、原文（和文）3,000文字程度です。速度向上を目指し鍛錬中です。

山口 朋子（やまぐち ともこ）
実用レベル・日英翻訳・医学・薬学2級合格
アメリカ在住

①医学・薬学（日英のみ）。
②看護師、フリーランス翻訳者。
③4年制大学文理学部英文学科卒業。英会話・英語講師を2年、会社で社内翻訳を1年半行う。
1999年渡米。米国の会社で事務アシスタントとして2年間勤務後、育児専念のため退職。2011年米国の短期大学看護科卒業。NJ州看護師免許取得。看護師としてフルタイムで1年半勤務。現在は土曜日のみ看護師として勤務。また、渡米後12年間に渡り、仕事・育児・学業の傍ら、在宅翻訳・校正業務（レストランガイド、旅行者のための日本語フレーズブックなど）を行う。
④翻訳会社からの依頼を受けることができます。主に平日を希望しますが、週末に仕事を受けることも可能です。

日下部 健一（くさかべ けんいち）
実用レベル・日英翻訳・情報処理2級合格
カナダ在住

① IT全般、特にプログラミング、ソフトウェア開発、ネットワーク、情報通信。他に計測機器関連。英日・日英対応できます。
②フリーランス翻訳者（2006年～）。カナダ在住（日本からみて -17～ -16時間の時差）。
③大学院の化学工学専攻を修了後、ソフトウェア開発会社に約6年半勤務。バンクーバーの通訳翻訳学校で7ヵ月間の講座受講（ディプロマ取得）を経て、独立。英日、日英の翻訳講座修了済み。CCNA、Java、2種情報処理技術者などのIT系資格を保有。TOEIC 915点。
④在宅の翻訳業務に対応できます。翻訳量の目安は英日翻訳で2,000～2,500語 / 日、日英翻訳で4,000文字 / 日です。Trados（2007のみ）、SDLX対応可。

Next Issue

2014年9月12日発行予定
※発行日や内容は変更になる可能性があります。

IJET-25 特集

2014年9月発行予定の次号（No.273）では、6月21-22日に東京ビッグサイトで開催された第25回英日・日英翻訳国際会議東京大会（IJET-25 Tokyo）を特集します。特集編集者は本誌のコラムオーナーで IJET-25の実行委員を務めた高橋聡さんです。ご期待ください。

Editor's note

特集記事の編集者をさだめて記事の企画をお願いするという新しい試みをはじめました。初代の特集編集者をお願いしたのは、医薬翻訳を専門とするアスカコーポレーションの代表取締役社長であり JTF 理事でもある石岡映子さんです。お忙しいなかでご協力いただいた石岡さんならびに関係者の皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。

製薬業界では新薬の世界同時開発・同時申請の実現をめざす動きがあり、今月号の座談会でも医薬翻訳の分野でかつてないスピードが求められている話題がでました。IT 翻訳で世界同時リリース（SimShip）が大きなテーマとなった製品は Windows 95でした。それから20年の間に、コンテンツ管理システムの発展によるワンソースマルチユースの普及、XML ベースへの移行による DTP 工程の消滅、翻訳支援ツールならびに機械翻訳の導入にともなう翻訳者の役割の変化など、納期短縮を目指して思いつく限りの試行錯誤がありました。今後はますます、IT 翻訳の分野で納期短縮に役立つことが実証された技術が医薬翻訳の分野にも導入されていくことになるでしょう。IT 翻訳と比較して専門性のハードルが高い医薬翻訳者も、他の翻訳者に先駆けて翻訳支援ツールに対応することが仕事を獲得するうえで有利となる機会が増えていくでしょう。もちろん翻訳会社も同様です。この分野においても、翻訳業界の専門性が深化していることを感じます。

おしらせが遅れましたが、No.271より三年ぶりに日本翻訳ジャーナルのデザインを一新しました。できるだけ PDF 版だけで記事が完結するように編集方針も変更しています。これまで以上に日本翻訳ジャーナルをご愛顧くださいますよう、よろしくお願いします。

編集長 **河野 弘毅**
Hiroki Kawano

一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌
日本翻訳ジャーナル
2014 年 7 月／ 8 月号 #272

発　行 ● 2014 年 7 月 11 日
発行人 ● 東 郁男（会長）
編集人 ● 河野 弘毅
発行所 ● 一般社団法人 日本翻訳連盟
〒 104-0031 東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
TEL. 03-6228-6607　FAX. 03-6228-6604
E-mail. info@jtf.jp　URL. http://www.jtf.jp/
デザイン ● 中村ヒロユキ（Charlie's HOUSE）
WEB 版制作 ● ジャーナル編集委員会

法務日英翻訳
プレイン・イングリッシュの薦め

"Sesquipedalianism" と "Legalese" を排除し、簡潔に英訳する

法務文書の翻訳では、誤解が生じる翻訳文はご法度だ。長々しい単語(sesquipedalianism)を排除し、難解な言い回し（legalese）は使わず、簡潔で真意がくみ取れる訳文を生成することが重要である。技巧に走り過ぎず、日本語原文が述べている要点を正確に読み取り、簡潔で意味がストレートに伝わる表現を心がけたい。助動詞 shall を使う際に陥る冗長性や冗漫な表現を、いかに排除するか、いかに簡潔に訳すかも検討する。

参加者同士でグループワークを行い、講師および異なる他の参加者のアプローチを学んでいただく。難解な法務文書の原文を読み解き、日英翻訳を学んでいくことが目的だ。難しい日本語をいかにプレイン・イングリッシュにまとめるか。今回のセミナーで掴んでほしい。

講師　リサ・ヒュー 氏

カナダ出身。トロント大学で東アジア研究を専攻。日本在住は 18 年。日米会話学院で日本語を学び、上智大学に留学。　仙台市にて JET プログラム国際交流員として勤務後、企画販売を担う総合衣料メーカーである株式会社ワールド、TMI 総合法律事務所勤務を経て 2011 年 1 月に翻訳者として独立。本年 4 月 14 日、株式会社ベルトランスレーション代表取締役に就任。法務、マーケティング分野を中心に翻訳業を展開している。

2014.9.9 Tue.　14:00-17:00
大阪大学中之島センター

お申込みについて

場所　：大阪大学中之島センター 3 階 304 （大阪市北区中之島 4-3-53）
定員　：100 名（先着順）
参加費　：JTF 会員 2,600 円（税込）／非会員 3,600 円（税込）／学生 2600 円（税込）
【懇親会のご案内】講師を交えて懇親会を開催します。ぜひご参加下さい。
時間：17：40 ～ 19：30
会場：「大阪 土山人」 大阪市福島区福島 1-1-48 堂島クロスウォーク 1 階
会費：4,000 円　※先着 40 名
申込期限：2014 年 9 月 4 日（木）
申込方法：事前申込制。ウェブサイト（http://www.jtf.jp）からお申込下さい。
参加料は期限までに指定銀行口座にお振込み下さい。
振込先　：一般社団法人日本翻訳連盟 三菱東京 UFJ 銀行 八重洲通支店 普通 番号 4631687
問合せ　：日本翻訳連盟　〒 104-0031 東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
TEL：03-6228-6607(代表)　FAX：03-6228-6604
主催　：一般社団法人日本翻訳連盟
後援　：大阪大学大学院言語文化研究科
特定非営利活動法人日本翻訳者協会（JAT）
The Society of Writers, Editors, and Translators（SWET）

JTF JOURNAL #272 July / August 2014

頒布価格　540 円（税込）

一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌
日本翻訳ジャーナル
2014 年 7 月 11 日発行